

# 文化の交差点

*bunka to bunka no kousaten*

2022年冬麗号



## contents...

### サークル見聞録

- |                               |     |
|-------------------------------|-----|
| 繊維研究会 早稲田祭ファッションショー「おやすみ」     | p 1 |
| 舞台美術研究会 2022年度秋季研究会公演『ゴレムの葬送』 | p 2 |
| 国際問題研究会 早稲田祭展示発表              | p 3 |
| 劇団木霊 2022年11月企画公演『(ほつれる。)』    | p 4 |

### 文化の案内板

- |                    |     |
|--------------------|-----|
| マンドリン楽部 第208回定期演奏会 | p 5 |
|--------------------|-----|

### Essay

- |                               |     |
|-------------------------------|-----|
| 『ウクライナから来た少女 ブラータ、16歳の日記』を読んで | p 6 |
|-------------------------------|-----|

### 文化の散歩道

p 7

「文化の交差点」2022年冬麗号

発行日：12月2日 / 発行者：「文化の交差点」編集委員会 代表・神原（教育4年）

連絡先：090-2331-4456 waseda-bunren@hotmail.co.jp

早稲田祭2022運営スタッフ 繊維研究会

## ファッションショー「おやすみ」を見て

(11月5日@11号館ピロティ)

観客でびっしりと埋め尽くされた11号館1階ピロティで、繊維研究会さんによるファッションショーが行なわれました。モデルさんによって次々と披露される個性的なファッションに会場は大いに賑わいました。

私がまず注目したのは、服装の色合いです。黒や深めの青色などを基調とした落ち着いた色の衣装が披露される一方、対照的に白を基調としたシンプルな衣装も見応えがありました。そしてそれだけでなく、服を切り刻むようにして作りあげられた衣装など、斬新なアイデアによってつくられたものが披露され、作製者の創意性が随所に散りばめられたファッションショーでした。

特に印象的だったのは、女性モデルでは一番最初に登場した、青色の花を模した装飾をつけたファッション。花の部分が目立ちすぎず、服の生地とうまく調和することで統一感があり綺麗でした。男性モデルでは、黒色の生地を切り刻んだような奇抜なファッション。一見、黒一色で無難な服装にも見えたが、モデルが背中を見せた途端、肩に赤い薔薇のような花の装飾が,,,これも決して派手な色ではなく、黒色の生地をうまく生かす形でつくられていたと思います。お疲れ様でした！ (蓮)



筆者が会場に着いた時にはすでに観客で一杯でした...後ろから精一杯腕を伸ばして撮りました!!

舞台美術研究会2022年度秋季研究会公演  
『ゴレムの葬送』を観て

(2022年11月11日～13日@学生会館B203)



ゴレムがそこで生き、生涯を終え死んでゆく「森」——人間が容易には入り込めないような神秘的な空間が、作りこまれた舞台美術と洗練された照明によって見事につくりだされていました。霧が立ち込める森の中で、林立する大木の足元の間からは今にも何かが飛びだしてきそう……そんな生命力と躍動感にあふれ、作り手のエネルギーを感じさせる舞台でした。

今回、素人ながら照明の効果にも注目していたのですが、レンとライカの心情を照らし出すように、複数の光がそっと2人に当てられていく様子が印象的でした。最後の流れ星の演出も見事で、とても綺麗でした。役者2人のリーディング劇も息がぴったり！ 総じて「ゴレムの森」の世界観を十分に堪能することができました。

公演開始前の舞台での光の演出も良かったです。布を纏った木々に光があてられると、青や緑のなんとも言い難い綺麗な色合いが生み出されました。劇中のゴレムの「森」とはまた異なる幻想的な空間を楽しむことができました。お疲れ様です。  
(モグラ)



国際問題研究会 早稲田祭2022

展示

## 「大戦前夜の現代世界——核戦争の危機と貧困・圧政を問う」

(11月5日 早稲田キャンパス10号館301教室)



私たち国際問題研究会は、「早稲田祭 2022」初日の 11/5、10号館 301 教室において、展示「大戦前夜の現代世界——核戦争の危機と貧困・圧政を問う」を開催しました。実に 3 年ぶりとなる完全対面での展示には、100 名を超える方がご来場いただき大盛況でした。

私たちは今回の展示で、ロシア軍がいまウクライナでおこなっている発電所などのインフラ施設を狙った攻撃の悪辣さや実際に核部隊を動かしてのプーチン大統領の核恫喝の危険性を徹底的に暴き出すとともに、これにひるむことなくウクライナの軍と民衆が一体となって反撃しロシア軍に占領された土地を次々と奪還している現状を具体的に明らかにしました。さらにロシアはなぜウクライナに侵略したのかを、プーチン大統領のイデオロギーとの関係で分析を深めたり、ウクライナの民衆がロシア軍の侵略に抵抗する拠点を歴史的にも掘り下げたりしてきました(1930 年代のウクライナ大飢饉「ホロドモール」の研究)。

また、東アジアにおいて台湾や朝鮮半島をめぐる米・日・韓と中・露・北朝鮮の軍事的角逐がかつてなく激化していることを図示するとともに、そのなかで日本の岸田政権が、安倍元首相の「国葬」を突破口に、国家安全保障会議(NSC)を司令塔として改憲や大軍拡に突き進んでいる危険性を批判してきました。

11 テーマ、13 枚に及ぶ私たちの展示には、「ウクライナの戦況と目的、プーチンの思想や中国の台湾の独立を否定する理由など詳細に解説していてわかりやすかった」などと、老若男女さまざまな方から多くの感想をいただきました。

今回の展示の成功にふまえ、今後も私たちはより批判的により創造的に研究を前に進めていきたいと思えます。

(国際問題研究会会員)



## 劇団木霊2022年11月企画公演 『(ほつれる。)』を観て

(11月25日～11月27日 劇団木霊アトリエにて)

11/26(土)、18:00～『(ほつれる。)』を観劇した。

公演は、「えっ…、それ、どういう意味?!」の連続。具体的な表現を極限まで排除し、すべての理解を観客にゆだねていた。“森の中のアトリエで、創作活動をする芸術家たちの話”というのが、おそらく物語の設定なのだが、それがいつの時代、どこの国なのかも、登場人物がどういう人なのかも、何一つ説明がない。しかも台詞は、普通は組み合わせられない言葉が組み合わせられ、難解な詩のよう。観客に対し挑戦的、ある意味“不親切”とも言える。芸術に分かりやすさを求めるな、という意図?



それでも、観ていくうちに、なぜだか感じ取れることが増えてきて、面白かった。私の一見解にすぎないが、芸術家の苦悩を感じさせられた。「芸術の価値は他からの評価で測れるのか」「国家から評価される『売れる』芸術と、『顔が見える範囲の人を喜ばせる』芸術は対立するのでは」…そんな問いが投げかけられた気がした。また、「不況で客足が遠のく」と、なぜかここだけリアルな表現もあり、コロナ禍の演劇人たちの状況を思った。役者も観客も生身の人間で、同じ時代を生きているからこそ、響きあうものがあったのだと思う。

他に印象に残ったのは、役者の身体表現だ。体をよじらせて壁に寄りかかったり、ゴツンと音が出るほど、床に体をモノのように投げ出したり。血の通う肉体を、まるで無機質な棒の様に使う表現からは、むしろ芸術家の葛藤が強く伝わってきた。

だが、役者たちの表現力がすばらしすぎて…特に「ブルーベリーパイ」を頼るパントマイムは、観ていてお腹が減って大変だった！ とにかく力のこもった公演だった。すべての役者に拍手を送りたい。

(とろろ汁)





# 早稲田大学マンドリン楽部 第208回定期演奏会

2022年12月23日(金)  
18:00開場 18:45開演  
ティアラこうとう 大ホール

有観客開催

入場料:無料

配信をご覧になる方は、マンドリン楽部YouTubeチャンネル  
からご視聴ください

## 曲目

### 【第Ⅰ部】

『エニグマ変奏曲』より「ニムロッド」

作曲/E.エルガー 編曲/久松祥三

組曲『惑星』より 「火星 土星 木星」

作曲/G.ホルスト 編曲/田野井蔵人、石川慧

学生指揮者：満嶋真ノ介

### 【4年合奏】

『ヴォカリーズ』 作曲/S.ラフマニノフ

### 【第Ⅱ部】

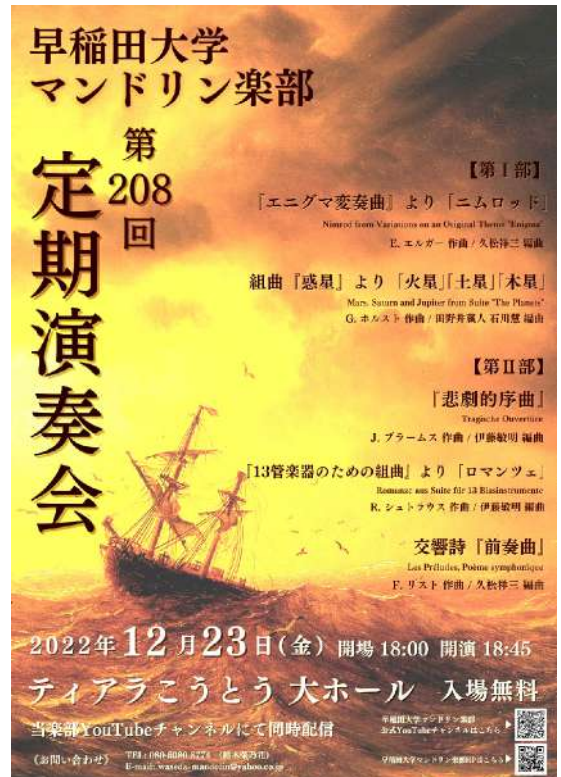
『悲劇的序曲』 作曲/J.ブラームス 編曲/伊藤敏明

『13管楽器のための組曲』より「ロマンツェ」

作曲/R.シュトラウス 編曲/伊藤敏明

交響詩『前奏曲』 作曲/F.リスト 編曲/久松祥三

学生指揮者：岩井良樹



## □注意事項

開催形態は変更の可能性があります。  
随時HPなどでご連絡致します。

演奏会に関するお問い合わせはマンドリン楽部  
広報 (waseda\_mandolin@yahoo.co.jp)まで。

## 『ウクライナから来た少女 ズラータ、16歳の日記』

(世界文化社) を読んで



今年2月のプーチン政権によるウクライナ侵略で、16歳のウクライナ人女性、ズラータ・イヴァシコワさんの日常は突如奪われた。「今朝早くね、爆音が聞こえたのよ。朝の4時頃」「……爆音？」(2月24日、母親との会話)。「明日から戦争になります」(2月25日、美術系専門学校の先生のお話)。刻一刻と変わる状況に戸惑いながらも、ズラータさんは母親に促され、幼い頃から一度は行く決めていた日本への避難を決意する。豊かな自然が広がる

故郷・ドニプロ (ウクライナ東部の都市) を後にして…

ポーランド国境での日本のテレビクルーとの奇跡的な出会いや他の日本人による手厚い支援など、様々な偶然や人の助けを得てズラータさんは日本へと「飛行」する。何度も絶望的状况に追い込まれた彼女を突き動かし続けたのは、“日本を見ずに死んでたまるか！”という強い思いだ。

特に私はズラータさんが時折り述べる、今回の侵略に対する思いを読んで考えさせられた。「本当に、いったい、何のための、誰のための戦争なんだろう」。理不尽さを感じずにはいられない彼女は言う、「ウクライナは豊かな土壌の国」であり、この土を「ウクライナの人々はとても誇りに思って」と。そして、「みんな自分たちの家を壊され、土地を奪われ、愛する家族を失っている」ことは、「どの国の、どんな人にとって」も辛く酷いが、「ウクライナ人にとっては、もっとそのいたみは深いのだ」と。ズラータさんの旅路を追うことで、いまでも侵略に向き合うウクライナの人々の思いに少し触れることができた。本書には、彼女が避難する過程で描いた絵も収められている。ぜひ購読をお勧めしたい。(鏡)



ズラータさんが描いた故郷・ドニプロの風景 (複製原画、池袋ジュンク堂にて)

# 文化の 散歩道



褐色のグラデーションが美しい文キャンのメタセコイヤ。思わぬきりたんぽに見えてきて…もう冬びすね。

サークルの活動や企画紹介など、  
投稿募集中です！  
お気軽にご連絡を！  
(連絡は表紙に掲載の「連絡先」  
まで)